個別最適な学びの実現に向けた
組織的な教育データ活用の実践研究

学籍番号（２１９１１９）
氏　　名（中西　遼）
主指導教員（寺嶋　浩介）
副指導教員（森田　英嗣）

１．背景

1.1　T中学校の課題

T 中学校の課題を次の４点に絞った。

①　個別の学習指導　　②　学習活動の工夫と改善　　③　生徒指導に関わる教職員どうしの連携　　④　GIGA スクール構想における生徒１人１台端末の活用

筆者はT 中学校の最大の課題を課題①であるとらえ，その解決のために課題②～④について一体的に取り組む必要があると考えた。

1.2　研究の目的と全体計画

課題を踏まえたうえで先行研究を調査し，その結果，「学習指導の充実」と「生徒指導の充実」を生徒一人ひとりの状況を教育データで把握しながら実現させていくことが，T 中学校における個別最適な学びの実現に向けた「指導の個別化」につながると考えた。そして，この実践を実現させるには教育データを学校全体で組織的に活用することが必要であると考え，研究テーマを「個別最適な学びの実現に向けた組織的な教育データ活用」と設定した。

＜期待される成果＞

①（教師）個別の学習支援の取組の実現
②（教師）これまで以上に，各生徒の実態に合わせた生徒指導ができる
③（生徒）自らの学習状況を把握し，主体的に学習に取り組むことができる
④（生徒）生徒指導上の問題行動が改善される

２．教育データの実態の把握と先行実践（研究１年目）

研究１年目の取組から，次のような気づきや課題を得た。

・多くの教職員が「個別の学習支援」と「迅速かつ組織的な生徒指導」が実習校の取り組むべき課題であると認識している。
・生徒用 PC の活用過渡期にある現時点だからこそ，紙で行うのか，デジタルで行うのかをもう一度取組ごとに吟味することが重要であると考えた。
・ICT を活用した教育データの入力方法の改善は，日常業務の時間短縮として働き方改革につながると考えられる。
・授業のデジタル化を進めるためには，実践の内容，ねらい，進め方，準備，考慮される問題点等について，十分に検討する必要がある。また，学校全体の実践とするためには，研究チ

ームとしてではなく，研究部を中心とした校務分掌としての働きかけが必要である。
・教育データの活用は，「これまでにない個人情報の活用」である側面を考慮し，活用していく上で生じる，または生じと考えられる問題について，市のガイドラインを遵守しつつ，新たな課題については市教育委員会との意見交流を行うことが必要である。

３．組織的な教育データの活用（研究2年目）

この 3 章では，研究 2 年目の実践として「学校組織の中心を担う３つの校務分掌（研究部，教務部，生徒指導部）において教育データを活用する」ことに取り組んだ。これまでの成果と課題を振り返っておく。

＜成果＞
・教育データを活用した授業改善に取り組むことができた。 ・生徒用 PC の活用頻度や活用しているアプリのバリエーションが豊富になった。 ・個別の指導・支援など，「指導の個別化」に教育データを生かしている教員が増加した。 ・教育データの活用パターンのうち，A1，B2，C1 について実践が進んでいる。 ・懇談資料として教育データを活用する実践を行うことができた。 ・教育データを，個別の対応の改善に活用する事例が得られた。 ・学習面同様，生徒指導面においても，データによって直感的な判断を改善できる
＜課題＞
・「指導の個別化」に教育データを生かす教員をもっと増やす。 ・教育データの活用パターンのうち A2，C2 など，教職員全体での活用には至っていない。 ・教職員自身が教育データについて学び，使えるようなるための学びが必要。また，校内で支援する体制も求められている。 ・新たなシステムやアプリケーションの開発や導入が必要不可欠な活用もある。 ・どこまでシステムに任せ，どこを人が直接確認する必要があるのか，を組織的に検討する。 ・活用を広げていくには，好事例の提示や，実際に活用を経験するということが必要。

４．まとめと今後の展望

ここまでの実践を教育データの活用パターンと照らし合わせ，どの程度実現できているのかを検証した。検証の方法として，◎：学校としての実践ができているもの，○：複数の教員が実践ができたもの，△：筆者のみが実践していると思われるもの，▼：実践できていないもの，または，実践したがうまく進まなかったもの，として評価した。

実習校においては，この実践課題研究に取り組み始めたことが，コロナ禍等でいったん途切れていた授業研究を再興させるきっかけとなった。筆者も含めまだまだ手探りで実践を進めている状態ではあるが，確実に前進していると感じている。好事例を整理し，さらに活用を進め，検証も行っていきたい。また，来年度からは小学校も含めた中学校区として授業研究が行われることとなった。今年度の各分掌や教員による実践を，校内だけでなく校区に広げ，9 年間での教育データの活用を目指して今後も研究を進めていきたい。